神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

About a recently discovered lecture of Soseki : relations of things and three types of man

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田中, 敏彦, Tanaka, Toshihiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/475

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

漱石の大連講演『物の関係と三様の人間』について

―『満韓ところどころ』補論

田中敏彦

一、はじめに
二、『満韓ところどころ』の中断について
三、漱石の大連講演について
四、おわりに

一、はじめに

(1)「脱亜入欧」

すでに色々な機会に述べてきたように、私は、イム・グォンテク監督の一連の映画(「太白山脈」・「祝祭」・「風の丘を越えて」)によって触発され(一九九九年)、その映画の芸術性の深さに驚くと共に、そのような映画を生み出す隣国

について何も知らないことに驚き、韓国の歴史と文化の研究にしだいに深入りするようになっていったのだが、それとともに、若いときからフランス語・フランス文学・フランス哲学にあこがれて研究したり教えたりしてきた自分自身の中に「脱亜入欧」と呼ぶ他はない姿勢が根強く存在していたことに気が付かざるを得なかった。この「脱亜入欧」的姿勢を最も見事に定義したのは福沢諭吉である。

《されば今日の謀（はかりごと）をなすに、わが国は隣国の開明を待って共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、まさに西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ、悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり。》（「脱亜論」・明治一八年（一八八五）・「時事新報」三月一六日・[福沢・240]）

「脱亜入欧」とは、欧米の列強を見習って日本を西洋化＝近代化＝文明化し、列強のようにアジアの国々を侵略し植民地化するということであり、したがってそれは侵略し植民地化すべきアジア諸国に対する蔑視（「アジア東方の悪友」）と、欧米に対する崇拝（「西洋の文明国」）が表裏一体になっていることを意味する。さらに言い換えれば、欧米に対する劣等感とアジアに対する優越感の複合体を意味する。しかし、次のような反論はありうるだろう。「脱亜入欧」はすでに過去のこと、少なくとも「十五年戦争（一九三一年の満州事変から一九四五年の太平洋戦争の終結までを連続した戦争過程と見なす、鶴見俊輔が提唱した史観）」以後にはもはや失効しているのではないのか。ところが、どうやら「脱亜入欧」は、現在に至るまで多少姿を変えながら近代の日本を貫く根本的「姿勢」として存在し続けているようなのだ。私はその「姿勢」を自分自身の中に発見するとともに、それが戦後の日本社会を規定し続けていることに気が付

いたのである。もっとも、そのことに気が付いたということ自体が、すでに「脱亜入欧」的姿勢に変化が生まれている兆候でもあったのだが。

（2）第三の開国

以上のことを歴史的に位置づけるために、進藤榮一氏が『東アジア共同体をどう作るか』で述べている三つの開国論を援用してみよう。

《十九世紀産業革命がヨーロッパの時代をつくり「第一の開国」を私たちに求めながら、二十世紀工業革命がアメリカの時代をつくり「第二の開国」を求めたように、いま二十一世紀情報革命がアジアの時代をつくって、三度び私たちに「開国」を求めている。

最初の開国が、領土拡大のテリトリー・ゲームによるグローバル化の衝撃下に進められ、それゆえ国家を強めることに主軸がおかれて開国は、明治維新として展開した。第二の開国が、市民生活の豊かさを求めるウェルス・ゲームによるグローバル化の衝撃下に展開し、それゆえ市民社会を強めることに主軸がおかれて開国は、戦後改革として展開した。

いま「第三の開国」が、知識資本主義のナレッジ・ゲームによるグローバル化の衝撃下に求められ、それゆえ「開国」の主軸は、国家を超えることにすえられる。[進藤・236-237]》

「第一の開国」は、テリトリー・ゲームの時代、すなわち侵略戦争と植民地支配の帝国主義の時代であり、「脱亜入欧」はこの時代の日本を特徴づける表現である。アジアは蔑視されつつ植民地支配の対象と見なされ、「脱亜」は、「興亜」という標語のもとに実際には「侵亜」を意味する時代であった。近代の日本は、非欧米諸国のなかで植民地化を免れた

のみならず、唯一侵略戦争と植民地支配をおこなった国であるという特色を持っている。そしてその行きついた果てに、オキナワ・ヒロシマ・ナガサキという固有名詞で喚起されるような人類史上未曾有の戦禍を被ったのであった。原爆の投下には人種的な問題が絡んでいたとすれば、非欧米諸国の中で唯一侵略と植民地化に乗り出した国であることと、唯一の被爆国であることには必然的な連関があるとも言えよう。

「八・一五」（十五年戦争の敗北）は、「第一の開国」と同様アメリカ合州国を主たる相手にして「第二の開国」を日本に強いるものであった。それは戦後の日本が近代日本の根本的姿勢である「脱亜入欧」的姿勢を反省して再出発すべきチャンスであった。ところがそうはならなかった。なぜか。日本を占領したアメリカは、日本を民主化＝非軍国主義化することよりも共産主義をくい止める防波堤にすることを重要視し、侵略戦争の責任を一部の指導者のみに押しつけ、侵略戦争や植民地支配を担った人びとを復活させてアメリカの占領政策に利用したからである。そのため日本の支配者たちは侵略と植民地支配についてまともに反省することはなかった。日本の支配者たちの口から侵略戦争を正当化し、植民地支配を弁護する発言が繰り返し出てくるのはそのためである。「脱亜入欧」は「脱亜入米」という形で「第二の開国」期にも生き延びたのだ。「第二の開国」は戦後民主主義の旗手の一人である丸山真男によっても提唱された考えだが、それはアジアに対しては「鎖国」あるいは「忘却」を意味していた。それは「脱亜」が「忘亜」を意味する時代であった。

二〇〇三年の『冬のソナタ』の放送をきっかけとする「韓流ブーム」が劇的に示したことは、日本社会が韓国というアジアの隣国に対して文化的に鎖国状態にあったということである。もちろん、政治的には韓国とは一九六五年に、中国とは一九七二年に国交回復は行われていたし、経済的には日本にとって「第二の開国」以来もっとも重要な貿易相手

国であるアメリカ合州国の比重とアジア諸国との比重は一九九〇年代後半には逆転していた。寺島実郎氏が指摘するように、一九九〇年には日本の貿易輸出に占める割合は、米国三二％、アジア三一％であったのに対し、二〇〇三年には米国二五％、アジア四六％になり、日本の貿易構造は「脱米入亜」に変化していた（「真の東アジア連帯を求めて」）[寺島・24]。「韓流ブーム」の「底流」にこのような経済的レベルでのアジア・シフトがあったのである。近代社会が国民国家を単位とした競合的世界システムの時代であったのに対し、現代社会はヨーロッパ連合が示すように地域統合が進展し国民国家の主権が制限されつつある時代である。「第三の開国」とは、アメリカ一辺倒から脱却し、アジアネットワークとしての東アジア共同体への開国を意味する「脱米入亜」の時代、その意味で明治以来の「脱亜入欧」からの脱却の時代であると言えよう。

（3）本稿の問題設定

以上のような展望のもとに、日本近代の知識人と朝鮮半島との関わりを手がかりに日本近代を問い直す仕事として、「なぜ夏目漱石は『満韓ところどころ』を中断したのか？」（『日本語文学』第三四集・韓国・二〇〇六）と「福沢諭吉の『脱亜論』をめぐって」（『神戸外大論叢』・第五九巻第3号・二〇〇八）を私は発表してきた。

前者は、漱石の紀行文の中断は安重根による伊藤博文射殺事件と関連していることを明らかにし、韓国や満州の侵略や植民地支配を括弧に入れることで成り立った軽妙な紀行文の文体に括弧を外すことを要求する事件を語ることは不可能であるゆえに、新聞連載は中断されたという仮説を提案したものだが、二〇〇九年一月に同じテーマで講義をした機会に（二〇〇八年度後期市民講座特別コース）、様々な内容を補足することになった。本稿はその補足部分を基に執筆

したものである。

まず、『満韓ところどころ』の中断に関して、旧論文執筆後に発表された研究を検討する（第二節）。そして漱石が満州で行った講演の一つ『物の関係と三様の人間』がやはり旧論執筆後に発見され、『満韓ところどころ』研究に新しい光を投げかける可能性がでてきた。この講演の内容を詳細に紹介し分析する第三節が本稿の主要部分を構成している。

二、『満韓ところどころ』の中断について

私が、「なぜ夏目漱石は『満韓ところどころ』を中断したのか」、と題して韓国で発表したのは、二〇〇六年二月で、論文として発表したのが同じ年の八月であった。その後発表された、この問題について触れている二つの研究についてここで検討しておきたい。それは三浦雅士氏の『漱石　母に愛されなかった子』（二〇〇八）と琴秉洞（クム・ピョンドン）氏の『日本人の朝鮮観　その光と影』（二〇〇六年十月十日出版）である。さらに『満韓ところどころ』について調べている過程で、意外な事実を発見したのでそれも補足しておきたい。

（1）三浦雅士氏の『漱石　母に愛されなかった子』

三浦雅士氏のこの本は、「母に愛されなかった子であるとはどういうことかという主題」[三浦・23] の様々な変奏として漱石の主要作品を読み解くものである。この主題は精神分析的であるとともに、「生まれて来るべき子ではなかったのではないか」[三浦・89] という実存的な問いでもあって、三浦氏の読解は説得力がある。しかし本稿に関わるの

は、次のように『満韓ところどころ』の中断に触れた箇所である。

《『満韓ところどころ』は、満鉄総裁になった旧友・中村是公に誘われた旅行の記録ですが、……紀行として優れているとは言えない。満州を地理的政治的に俯瞰しようとはしていないからです。そもそもその意図がない。旅は旅でも、中村是公そのほか旧知の人々を訪ねる過去への旅なのだ。心理的にはその要素の方がはるかに強い。したがって、むしろ小説である。……『満韓ところどころ』がきわめて中途半端な終わり方をしているのもそのためである。……しかし、紀行としてはきわめて中途半端だが、小説としてはきわめて暗示的であると言わなければならない。漱石の読者なら、ここでどうしても『坑夫』を思い出してしまうからです。自己内面の旅である小説を思い出してしまう。

漱石自身もまた思い出したに違いない。書き進めてきた『満韓ところどころ』が、結果的に過去への旅であり、自身の病の意味を自覚する旅であり、自己内面への旅であることを思い知らされたに違いない。

なるほど大晦日になったには違いないけれど、もし自己内面へ向かう旅であるとするならば、まさにここで打ち切るのが至当なのだ。坑内のとば口の静かな闇の中でしばし時を過ごした後、奥へ奥へと下りて行くその先に待ち構えているのは、自己自身との対面であるほかない。》[三浦・106-107]

『満韓ところどころ』は、過去への旅、自己内面への旅であって、その意味では小説だと三浦氏は断定する。それは『満韓ところどころ』を社会的歴史的文脈おいて把握しないで、漱石の心理あるいは無意識との関係でのみ理解する試みを正当化するためだ。撫順炭坑の坑内に降りていくところはたしかに漱石の小説『坑夫』を思い起こさせはする。だ

が、なぜ、《もし自己内面へ向かう旅であるとするならば、まさにここで打ち切るのが至当なのだ》と言えるのだろうか。《坑内のとば口の静かな闇の中でしばし時を過ごした後、奥へ奥へと下りて行くその先に待ち構えているのは、自己自身との対面であるほかない》ということが、なぜそこで打ち切る理由になるのか。自己自身との対面であるなら、『坑夫』の主人公がそうであるように坑内に降りてゆくべきではないのか。「母に愛されなかった子」という精神分析的・実存的主題で漱石の小説を分析していく立場が間違っていると言うのではない。だが、問題はその立場ですべて説明しきれるのかどうかである。とりわけ『満韓ところどころ』のように、純然たる芸術としての小説ではなく、実際の旅行に基づいた紀行文である場合にはなおさらである。

この紀行文の基になった漱石の実際の旅の行程を、漱石の日記から復元してみると、次のようになる。一九〇九年九月二日に東京を発った漱石は、翌日朝大阪から鉄嶺丸で出発し、九月六日に大連に着き、旅順・熊岳城・営口・湯嶺子・奉天・撫順（九月二十一日）・ハルビン・長春・奉天と旅した後、九月二十八日朝鮮に入り、平壌・京城・仁川・開城などを経て、一〇月一三日京城から汽車で釜山に行き、関釜連絡船で一〇月一四日下関に着き、大阪を経て京都で一泊して、東京に帰って来たのは一〇月一七日の朝であった。『満韓ところどころ』は、早速十月二十一日から『東京朝日新聞』に連載が開始され、この行程通りに書き継がれて、撫順炭坑（九月二十一日）を訪れたところで、「ここまで新聞に書いてくると大晦日になった。二年に亘るのも変だからひとまずやめることにした」と短い弁解をつけて、終わっている。問題は、漱石はなぜ他ならぬここで、つまり旅程の順序ではハルビンの一つ手前である撫順で、連載をうち切ったのか、ということだ。

日本に帰って来た漱石と入れ違いに、一九〇九年十月十六日同じ鉄嶺丸で大連に向かった伊藤博文が十月二十六日安

重根によって射殺されたのはハルビンであり、漱石はこのまま連載を続ければ、次の行程であるハルビンでの見聞を書かないわけにはいかなかったはずであり、当然その事件についても触れずに済ますことはできなかったであろう。だが、そのことは既に述べたごとく、侵略や植民地支配について見て見ぬふりをすることによって成り立っている紀行文の枠組みを踏み破ることを漱石に強いるものであった。漱石は実際にはその事件に触れることなく、『満韓ところどころ』を中断することを選んだのであった。

紀行文の枠組みを踏み越えてもその事件になぜ触れないのかという疑問は残る。この点で畑中康雄氏が漱石の『坑夫』について次のように述べていることは示唆的である。

《夏目漱石の作品に『坑夫』がある。これは一九〇八（明治四十一）年一月から四月まで、朝日新聞に連載したものだ。この作品の坑内の描写は、長い坑内暮らしのぼくにとっても舌を巻かせるものがある。しかも、漱石は坑内になど一度も入ったことがないのに。しかし、僕は『坑夫』を読むたびに、その都度大きな不満を覚えずにはいられない。

漱石がこの作品を書く動機は、前年の暮に作者の家にやって来た青年の話である。作品にもあるとおり、青年は足尾銅山で働いた体験をもち、それを漱石に語って聞かせたのである。作中、足尾銅山という固有名詞は出てこないが、少し注意して読めば場所は足尾ということはわかるし、足尾千軒といわれた街の描写もある。

足尾銅山の歴史のなかで、最大の暴動が起こったのは一九〇七（明治四十）年二月であった。漱石が、青年から足尾銅山の話を聞いた年である。漱石が、青年から聞こうと聞くまいと、高崎連隊まで出動したこの暴動を知らぬはずがない。それでいて、暴動に一語も染めていないというのは不思議である。》[畑中・302-303]

もっとも、小説である『坑夫』は「意識の流れ」を描く実験でもあったから、暴動という事件が関心の外に置かれた

のはそのためであると説明することもできる。しかし『満韓ところどころ』を中断せずに、漱石が当時ベルリンにいた弟子の寺田寅彦宛の手紙（十一月二十八日付け）で書いているように、《伊藤は僕と同じ船で大連に行って、僕と同じところをあるいてハルビンで殺された。僕が降りて踏んだプラットホームだから意外の偶然である》［漱石・1990・216］と語る事は可能ではなかったか。そして漱石がさらに紀行文を書き継いで韓国について語ることは可能ではなかったか。

（2）琴秉洞氏の『日本人の朝鮮観　その光と影』

《『満韓ところどころ』は満州の部分だけが書かれて韓のところは書かれていない。連載が年を越すのを漱石がいやがったためというが、私は『日記』にみる漱石の朝鮮同情と朝鮮文化に対する深い洞察が、日本人の一般的認識と異なっているため、書き継ぐことをためらわせたのではないかと思っている。なぜ『満韓ところどころ』が中途に終わったかについては、数多い漱石研究者の研究にも指摘はないようだ。私には朝鮮認識の乖離に原因があるように思えてならない。》［琴・202］

漱石はこの『満韓ところどころ』の旅の間『満韓紀行日記』と呼ばれる旅日記を付けていた。『日記』には、中断されたために『満韓ところどころ』では書かれなかった朝鮮の旅の見聞が描かれている。ここで琴秉洞氏が述べているように、そして私が「なぜ夏目漱石は『満韓ところどころ』を中断したのか」において言及しておいたように(五、書かれなかった韓国)、『日記』には漱石の「朝鮮同情と朝鮮文化に対する深い洞察」が見られる。それが「日本人の一般的認識と異なっている」ために、韓国について書き継ぐのがためらわれたのではないか、というのが、琴秉洞氏の見解で

ある。たしかに漱石が、『満韓ところどころ』を書き継いで、『日記』に記述された朝鮮民族への同情、そしてその裏返しである、日本人による植民地支配に対する批判的見解を、当時のほとんどのマスコミがそうであったように植民地政策に積極的な『朝日新聞』に連載する事は困難であったであろう。この意味で琴秉洞氏の見解は的を射ていると言える。しかしこの見解も、なぜ他ならぬハルビンの手前の撫順で中断したのかという問いに適切に答えているとは言えないだろう。在日である琴秉洞氏も意外なことに『満韓ところどころ』が中途に終わったかについては、数多い漱石研究者の研究にも指摘はないようだ。」と琴秉洞氏が書いておられるので、私の論文の抜き刷りを送ろうかと思っていたら、氏が二〇〇八年九月二十四日八十一歳で亡くなられたという記事をインターネットで見た。九州の炭坑で働らく炭坑夫の長男として生まれた琴秉洞氏は在日二世の朝・日歴史研究者であった。甲申政変の中心人物で改革派官僚金玉均の研究のほかに、「秀吉軍の奴隷連行と朝鮮女性たちの運命」や「関東大震災下の朝鮮人虐殺問題」など多数の論文がある［インターネット版・朝鮮新報・2008.10.3］。

（3）漱石の『満韓ところどころ』を校正したのは誰か？

《九月の夜の不平

何となく顔がさもしき邦人の首府の大空を秋の風吹く

つね日頃好みて言ひし革命の語をつつしみて秋に入れりけり

今思えばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり

この世よりのがれむと思ふ企てに遊蕩の名を与えられしかな
秋の風我ら明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く
時代閉塞の現状を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな
地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聞く
明治四十三年の秋我が心ことに真面目になりて悲しも》［啄木・143］

漱石が『満韓ところどころ』の旅をして一年後の一九一〇年（明治四十三年）の八月二十二日「韓国併合条約」によって韓国は日本に併合され独立国としての大韓帝国は姿を消した。日本人のなかからそれに対する異論や反対の声は上がらなかったと言われる。《併合直後の一九一〇年八～十月の『東京朝日』『大阪朝日』『東京日日』『読売』『万朝報』の有力新聞社説と総合雑誌『太陽』『中央公論』『日本及日本人』掲載の論説を分析した姜姜東鎮氏の研究によると、すべての社説・論説が日本の韓国併合を美化し、こじつけの論理で併合を合理化しているという（『日本言論界と日本』）。》

また自由主義的立場に立つ新渡戸稲造は一九一〇年年九月一三日第一高等学校入学式での校長演説で、こう述べた。《次に忘れることのできないのは朝鮮併合の事である。之は実に文字通り千載一遇である。我が国は一躍してドイツ、フランス、スペインなどよりも広大なる面積を有つこととなったのである。……とにかく今や我が国はヨーロッパの諸国よりも大国となったのである。諸君は急に大きくなったのである。》

いくらかは韓国植民地化に批判的であった社会主義者もまた、《併合を既成事実として是認する論説を掲げた。たとえば片山潜派の『社会新聞』（一九一〇年九月一五日付け）は、「為政者はもとより、全日本国民は個人とし、社会団体

として彼等を誘導教育し、新同胞として立派にするの必要がある』と論じている［以上の引用は海野・.225-227］。

韓国併合に対する支持・礼賛一色の世論のなかで、違和感を表出した希有の例としてしばしば引かれるのが、石川啄木の「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聞く」の一首（連作「九月の夜の不平」の第七首）である。連作の第二、第三首は、その年の六月に起きた大逆事件（明治二三年六月）に関連しているが、第六首の「時代閉塞の現状」は、啄木が八月に書きあげたばかりの同名の評論を踏まえている。例えば次のような箇所を。《時代閉塞の現状はただにそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大体に於いて一般学生の気風が着実になったと言って喜んでいる。しかもその着実とは単に今日の学生のすべてが其在学時代から奉職口の心配をしなければならなくなったといふ事ではないか。さうしてさう着実になってゐるに拘らず、毎年何百といふ官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしてゐるではないか。しかも彼等はまだまだ幸福な方である。……彼等に何十倍、何百倍する多数の青年は、其教育を享ける権利を中途半端で奪われてしまふではないか。中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は実に其生涯の勤勉努力を以てしても猶且三十円以上の月給を取ることが許されないのである。無論彼等はそれに満足する筈がない。かくて日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其数を増やしつつある。今やどんな僻村へ行っても三人か五人の中学卒業者がゐる。さうして彼等の事業は、実に、父兄の財産を食ひ減らす事と無駄話をする事だけである。我々青年を囲繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。》［啄木・278］「今やもう少しも流動しなくなった」「空気」に「囲繞されている」ような「時代閉塞の現状」の自覚において、啄木は韓国併合の報を聞いたのであった。そのような自覚が彼に新渡戸稲造のような大国意識を持つことを妨げ、韓国併合への違和感を抱かせたのだ。

ここで啄木を取り上げるのは、韓国との関連だけでなく、啄木の年譜を見ていて漱石の『満韓ところどころ』と啄木に意外な関係があることを発見したからである。

《明治四十二年（一九〇九）二十四歳

（……）同月【二月】、「東京朝日新聞」編集長佐藤真一に履歴書と『スバル』【啄木が発行名義人として一月に創刊された雑誌】を送り、就職を依頼。三月より、校正係として採用される。月給二十五円、他に夜勤一夜につき一円、北原白秋のもとへかけつけ、黒ビールで祝う。なお、朝日で校正を担当した作品は、『二葉亭四迷全集』、夏目漱石『それから』『門』など。》【啄木・333】

『それから』は漱石が『満韓ところどころ』の旅行に出る直前に完成した小説（八月一四日脱稿・新聞連載は六月から十月）であり、『門』は『満韓ところどころ』の連載（明治四十二年十月から十二月）後の明治四十三年三月から六月の連載である。『満韓ところどころ』前後の作品を担当しているので、『満韓ところどころ』も啄木が校正をした可能性は極めて高いと言っていい。文学と恋に耽溺したため旧制中学校を五年生の時に退学してしまった啄木は、明治時代の立身出世コースから脱落して、生涯貧困に苦しむことになった。先ほど引用した「時代閉塞の現状」の、《中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は実に其生涯の勤勉努力を以てしても猶且三十円以上の月給を取ることが許されないのである》という一節は、彼自身の境涯にほかならなかった。

一方の漱石は、東大の英文学講師の職を辞して東京朝日新聞社に明治四十（一九〇七）年に入社した。月給は二〇〇

円、賞与が年二回の契約で、それまで奉職していた東大は年俸八〇〇円、さらに掛け持ちで第一高等学校で年俸七〇〇円、明治大学で年俸三五〇円の収入があったそうだが、朝日新聞に入って六〇〇円は年収が増えたと言われている［漱石・1995・676］また漱石が英国留学に行った折りに文部省から支給されたお金は年額一八〇〇円であったと『文学論』の序で漱石自身が述べている。

『満韓ところどころ』において漱石は、中村是公から旅費として五〇〇円貰い、足らなくなってさらに追加で貰ったと語る一方、満州のクーリーたちが一日五、六銭で暮らしているとも述べていた。

漱石は明治の文学者ではエリート層に属する一人であり、啄木はもっとも貧困に苦しんだ文学者の一人である。右に出てきた一連の数字がそれを如実に物語っている。一方は『満韓ところどころ』の著者として、もう一方はその校正者として二つの線が偶然交差していたのだが、漱石の方は啄木のことは何も知らなかったのではなかろうか。

三、漱石の大連講演

（1）発見された幻の講演

『満韓ところどころ』の二十六章を読むと、漱石がこの旅行の間に三回講演をしたことが確認される。

《大連に着いてから二三日すると、満州日々の伊藤君【満州日日新聞社の社長】から滞留中に是非一度講演をやって貰ひたいといふ依頼であった。えゝ都合が出来ればと受合った様な又断った様な軽い挨拶をして旅順に来た。すると其伊藤君が我々より一日前に同じ大和ホテルに泊まってゐたので、ただ、やあ来てゐるね位では事が済まなくなった。伊

藤君の話によると、余の承諾を得て講演を開くと云ふ事を、もう自分の新聞に広告して仕舞ったと云ふんだから、忽ち弱った。……実を云ふと、講演は馬車でホテルに着くや否や、此處の和木君からも頼まれてゐる。……橋本【左五郎・漱石の友人の農学者】は……君さう云ふときには快よく承諾するものだよとか君の様な人は遣る義務があるさとか色々な口を出す。余の大連でしゃべらせられたのは全くこの男の御蔭である。しかも短い時日のうちに二遍もやらせられた。その内の一遍では、云ふ事が無くって仕方がなかったから、私は今晩、なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと云って、妙な事を弁じてしまった。それを是公が聞きに来ていて、うん貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやると評したからありがたい。……営口で又頼まれると早速、君遣るさ、折角頼むんだものと例の通り遣り出したので、やむを得ず痛い腹の上にかけてゐた蒲団を跳ね退けて、演説をやりに行った。》［漱石・288-289］（【　】内は筆者による注）

つまり、大連で二回（①一回は『満州日日新聞』の伊藤君から依頼されたもの、②もう一回は和木君から依頼されたもの）、そして③営口で一回、都合三回の講演を漱石が行ったことは右の記述から明らかである。『満韓紀行日記』で確認しておくと、①については、九月十二日の記述《事務員養成所へ行って講話をやる。七時過より八時過一時間余やる。中村【是公・漱石の親友で満鉄の総裁】・田中【清次郎・満鉄理事】・国沢【新兵衛・満鉄副総裁】の諸君来聴。》［漱石・1990・112］がこれに該当する。中村是公が来聴していたのはこの講演だけであるから、《その内の一遍では、云ふ事が無くって仕方がなかったから、私は今晩、なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと云って、妙な事を弁じてしまった。それを是公が聞きに来ていて、うん貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやると評したからありがたい。》という記述は『満州日日新聞』

に依頼されて行った講演に該当すると考えられる。『漱石日記』の平岡敏夫氏は、この講演について、《なぜ講演が容易に出来ないか、その理由を講演。》と注をつけ、②の講演については《翌日の大連埠頭ホールでの講演内容は不明。》としている［漱石・1990・252］。

②の講演に関して、すでに九月十二日に《相生氏の方から桜木氏来る。埠頭に来て演説しろという。》［漱石・1990・111］という記述があり、これは『満韓ところどころ』の《実を云ふと、講演は馬車でホテルに着くや否や、此處の和木君からも頼まれてゐる。》［漱石・1994・288］に対応している（後者の「和木君」は前者に見える「桜木君」の間違いであろう）。翌九月十三日に、《朝相生氏、桜木氏と至る。今夜埠頭のhallにて講演を承諾す。……桜木氏、演説の迎にくる。馬車で相生氏方に至る。是公に逢う。……是公去る。晩餐。直ちに講堂に赴く。橋本君まず弁ず。余も一時間ほど饒舌（しゃべ）る。》［漱石・1990・112］とある。

③の講演に関して、九月十七日に《三時頃杉原氏、橋本と来る。約束故支度をして倶楽部へ行って演説をする。クラブ、軍政時代に造りたるもの。比較的立派なり。約一時間の後、宿に帰りてまた寝る。》［漱石・1990・117］とあるだけで、それ以上の事はなにもわからない。

この三回の講演は、わずかに①の大連講演だけが内容を推測する手がかりがあるだけで、いずれも内容不詳の「幻の講演」だったのである。

ところが二〇〇八年五月に次のような記事が配信された（インターネット版朝日新聞・2008/05/24　URL:http://www.asahi.com/culture/update/0524/TKY200805240108.html）。

《漱石「幻の講演」、旧満州地元紙に　「人には三タイプ」

作家夏目漱石が明治末、旧満州（中国東北部）の大連で行った講演の内容が、地元の「満州日日新聞」に掲載されていたことがわかった。講演していたことは知られていたが、内容はこれまで「不詳」とされていた。漱石の人間観がうかがえる興味深い内容だ。

満州日日によると、〇九年九月十二日午後七時から、大連の満鉄（南満州鉄道）従事員養成所で二〇〇人の聴衆を前に一時間余り講演した。この内容が「物の関係と三様の人間」というタイトルで、九月十五日から同紙一面に五日間にわたり連載されている。

満州日日新聞は満鉄傘下の日刊紙。国立国会図書館は同紙を所蔵しているが、〇七年の同紙創刊から二年ほどは欠けていた。同図書館は九七年に同紙のほぼ全期間をカバーするマイクロフィルムを購入、このマイクロフィルムに講演記事があった。》

この講演は、二つの大連講演のうちの、『満州日日新聞』の伊藤君から依頼された①の講演に違いない。私は国会図書館に依頼して『物の関係と三様の人間』と題された講演のコピーを入手した。読んでみるとかなり予想と異なっている。《その内の一遍では、云ふ事が無くって仕方がなかったから、私は今晩、なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと云って、妙な事を弁じてしまった》という漱石の説明を額面通りに受け取りすぎていたのである。たしかに冒頭で、人に話したい、聞かせたいというような着想は簡単には得られない、という話から始めている。こんな風に。

《講演・物の関係と三様の人間（於本社主催第二回学術講演會）

夏目漱石氏述

▲着想を得ること

今回の旅行は唯満州の見物、遊びと云ふことに過ぎぬから至って閑散な旅行のようであるが其実私にとっては見る事聞く事に之れ日も足らずと云ふ有様で非常に多忙である、ところが満州日日新聞社長の伊藤君から何かやれと云ふ話であって友人の間柄でもあるしやって見ようとは云ったもののさて之と云ふ着想もない、元来思い付きを得ることは大分困難の事で、人の考えた事をいい加減に焼直して話をするとか、又は書物にある事柄を其儘お話しすると云ふ様なことなら易い事であるが、しかし人にも話し人に聞かせたいと云ふ事はそう毎日ピコリピコリと出て来るものでない、又たとえ吾人の脳裏に電光の如く閃く事があったとするも、之を一々其儘云ふ事は聞く人に取って解せられるものでない、それで人をして判明せしむる様に話す為には英語で云ふと Elaborate 即ち思付の浮かんだものを飴細工見た様にダラシなく引き延べて話さねばならぬ、丁度学校の講義だとか外国の書物などに能くある通り判り切った事を幾度も繰返す、もう大抵でよせばよいと思ふ程に馬鹿馬鹿しくくだらぬ事を明細に説明して居る、併し之は事理を人に知らしめんとするには皆此の様にせねば人をして能く理解せしむる事が出来ぬからであって、自分の思い付きを人に知らしむる為には是非必要な事である、単に其骨子だけを云ふても解せらるるものでない、……（1）》（このように表記は読点のみで、句点は一切使われていない。（1）は五日間に渡って掲載された一日目を表す）

これは《なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか》を述べている部分と言えなくはないだろうが、いわば前口上にあたる部分にすぎない。《なぜ講演が容易に出来ないか、その理由を講演》という要約は、とうてい講演

全体にはあてはまらないように見える。『満韓ところどころ』の漱石の発言には誇張があったように見える。言い訳めいた前口上は右の引用からさらに続き全体の二割ぐらいを占めているが、講演の八割は題名が示す通り「物の関係と三様の人間」を論じているからである。

（2）旅行の二重性と大連講演

「なぜ夏目漱石は『満韓ところどころ』を中断したのか？」において私は、この『満韓ところどころ』の旅行には、《一方では、満鉄総裁が暗に期待している旅、すなわち満州や韓国における日本人の活躍の紹介ないし宣伝をするための視察の旅であり、他方では遊覧ないし漫遊の旅という曖昧さ》、あるいは二重性があると指摘しておいた（4.1. 旅の目的―視察あるいは漫遊）。

すなわち、一方では、満州や韓国における日本人の活躍を視察して宣伝することを暗に陽に期待されていたことは、『満韓ところどころ』の次のような一節から明らかである。

《参観すべき場所と云う標題（みだし）のもとには、山城町（やまぎちょう）の大連医院だの、児玉町の従事員養成所だの近江町の合宿所だの、浜町の発電所だの、何だのかだのみんなで十五六ほどある。なるほどこれでは大連に一週間ぐらいいなければ、満鉄の事業も一通り観る訳に行かないと云われるはずだ。しかも是公は是非共万遍なくよく観て行かなくっちゃいけないよと命令的に注意するんだから、容易じゃない。その上よく観て、何でも気がついた事があるなら、そう云いなさいと、あたかも余を視察家扱にするんだからなおさら痛み入る。》［漱石・1994・260-261］

漱石はその参観すべき場所のリストに従って、豆油の工場に行ったり、造船所に行ったりしているのだが、他方では、

「あたかも余を視察家扱にするんだからなおさら痛み入る」と漱石が述べるように、漱石は自分を視察に来たのではなく、《一私人で、ただ遊覧に来た》[漱石1994・290] と考えていた。友人である是公の期待はよくわかるが、提灯持ちをして満鉄の宣伝などしたくない、という一種のジレンマを漱石が感じていたということである。今回発見された大連講演は、『満韓ところどころ』の旅のこうした二重の性格について何か光を投げかけてくれるであろうか。

すでに引用した講演の冒頭はこうであった。《今回の旅行は唯満州の見物、遊びと云ふことに過ぎぬから至って閑散な旅行のやうであるが其実（そのじつ）私に取っては見る事聞く事に之れ日も足らずと云ふ有様で非常に多忙である》一方では《今回の旅行は唯満州の見物、遊びと云ふことに過ぎぬ》と言いながら、他方では《私に取っては見る事聞く事に之れ日も足らずと云ふ有様で非常に多忙である》と言っている。参観すべき場所のリストを渡されて視察家扱いされているからである。冒頭からこの旅の二重性ないし曖昧さが述べられている。

さらに大連講演の次のような箇所、これはまだ前口上の一部である。《平生外出嫌ひの者が何故満州などへ来たかと云ふにそれは判然しない、ただどう云ふ風の吹廻しか此地（こちら）へ高飛びして仕舞った、つまり只来たかったから来たのに過ぎないから、どうせ立派は講演なんか出来やう筈がない、私は満鉄の中村総裁とは懇意の間柄であったので一体満鉄なんて云ふ處は何する處だと聞いたら、貴様は馬鹿だ、それより満鉄の経営はどんな事して居るか、日本人の活動はどう云ふ風かを見て来いと云ふ事になって外出嫌ひの私が見聞の為め且つ後学の為め満州まで来る様になったので、……。（1）》一方では、「風の吹廻し」だの「只来たかったから来た」と言いながら、他方では「見聞の為め且つ後学の為め満州まで来る様になった」と言っている。

右の引用の後半部分は、『満韓ところどころ』冒頭の、是公が漱石を旅に誘う場面の原型である。《南満鉄道会社って

いったい何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして御前もよっぽど馬鹿だなあと云った。是公から馬鹿と云われたって怖くとも何ともないから黙っていた。すると今度いっしょに連れてってやろうかと云いだした。是公の連れて行ってやろうかは久しいもので、二十四五年前、神田の小川亭の前にあった怪しげな天麩羅屋へ連れて行ってくれた以来時々連れて行ってやろうかを余に繰り返す癖がある。そのくせいまだ大した所へ連れて行ってくれた試しがない。「今度いっしょに連れて行ってやろうか」もおおかたその格だろうと思ってただうんと答えておいた。この気のない返事を聞いた総裁は、まあ海外における日本人がどんな事をしているか、ちっと見てくるがいい。御前みたように何も知らないで高慢な顔をしていられては傍が迷惑するからとすこぶる適切めいたことを云う。》[漱石・1994・227]

以上見てきたように、旅の曖昧さは講演においても『満韓ところどころ』においてとまったく同様に繰り返し表明されていることがわかる。この曖昧さは漱石と満鉄総裁にして親友の中村是公との関係の曖昧さでもあったと思われる。是公は満鉄総裁として漱石に満州を視察して満鉄の宣伝を紹介を強く望んでいたであろう。《しかも是公は是非共万遍なくよく観て行かなくっちゃいけないよと命令的に注意するんだから、容易じゃない》とか、《貴様は馬鹿だ、それより満鉄の経営はどんな事して居るか、日本人の活動はどう云ふ風かを見て来いと云ふ事になって……》などの箇所を見ると、漱石に視察家としての振る舞いが強く要求されていたのは明らかであろう。しかし他方では単に学生時代の「連れて行ってやろうか」の延長で、満鉄の視察や宣伝を無理強いしているようにも見えないのである。

ところでこの講演は中村是公の目の前で行われた講演であった。《それを是公が聞きに来ていて、うん貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやると評したからありがたい。》「うん貴様はなかなか

旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやる」という是公の言葉は、一見満鉄総裁という権力者の傲慢な言い方のように見えるが、どうであろうか。この講演を通じて、漱石と是公は親友同士として、是公は許し、漱石はありがたいと思うような了解が成り立ったのであろうか？漱石が抱えていたジレンマは解消されたのであろうか？

（3）三様の人間

講演の題にもなっている「物の関係と三様の人間」というのは、人間には三種類ある、という興味深い考え方である。それは、①物と物の関係を明らかにする人（これは科学者や哲学者で、認識する人である）、②物と物の関係を変化させる人（これは実践する人、行動する人のことで、政治家・実業家・軍人・官僚などがこれに当たる）、そして③は物と物の関係を味わう人（これは芸術家のこと）の三種類である。このアイデアは最初は『文芸の哲学的基礎』で展開されたものである。

《かく分化作用で、吾々は物と我とを分ち、物を分かって自然と人間（物として観たる人間）と超感覚的な神（我を離れて神の存在を認める場合に云うのであります）とし、我を分って、知、情、意の三とします。此我なる三作用と我以外の物とを結びつけると、明かに三の場合が成立します。即ち物に向かって知を働かす人と、物に向かって情を働かす人と、それから物に向かって意を働かす人です。無論此三作用は元来独立して居らんのだから、ここで知を働かし、情を働かし、意を働かすと云うのは重に働かすと云う意味で、全然他の作用を除却して、それのみを働かすと云う積ではありません。そこで此うちで知を働かす人は、物の関係を明らめる人で俗に之を哲学者もしくは科学者と云います。情を働かす人は、物の関係を味わう人で俗に之を文学者もしくは芸術家と称えます。最後に意を働かす人は、物の関係

を改造する人で俗に之を軍人とか、政治家とか、豆腐屋とか、大工とか号して居ます。》［漱石・1995・88］

『文芸の哲学的基礎』は、漱石が朝日新聞に入社して、「入社の辞」に続いて、新聞に連載した最初の文章であり（一九〇七年【明治四十年】五月から六月）、《余の文芸に関する所信の大要を述べて、余の立脚地と抱負とを明らかにする》［漱石・1995・64-65］と述べているように、「還元的感化」を中心とした漱石の文学観を披瀝した重要な講演（元々は東京美術学校での講演）であるが、「物の関係と三様の人間」説はそのなかで特に重要な思想というわけではない。しかしなぜ漱石は大連講演でこの説を持ち出したのであろうか？

南満州鉄道の起点であるとともに欧州より東洋に至る鉄道の終点でもある大連で日本人の多くは満州の経営と富源の開拓に従事しているが、自分はそういうものの対極にいる人間である、と漱石は言う。《然し私は富源の開拓に力を致して儲を得やうと云ふ考も無ければ鉄道で豆を運んでウント運賃を取ってやらうとか石炭をどうしようとかの考へもない、ここに至ると同じ人間でも随分大した違ひがあるもので私は宅（うち）に居てゴロ付いて居ればよい到て金儲には縁の遠い商売であるが、諸君は刻一刻活動して満州の開発に力を尽くして居らるる、之は随分の差異（ちがい）である、云はば極端と極端とが生存して居るかの様であって而も之が又社会の面白い處である（2）》と述べた後、漱石は次のように続けている。《私は三四年前ある處で講演を依頼された、其時学理より論じて人間が如何なる分布発達をするものであるかなんて生意気な事を御話したことがある、之に就て少しく述べて見ようと思ふ（2）》。つまり、満州の経営と富源の開拓に携わる日本人たち、とりわけ満鉄の総裁を始めとする幹部や社員たち（この講演は満鉄の従事員養成所で行われた。聴衆の多くは満鉄の関係者であったであろう）と、漱石のような文学者・芸術家という極端に異なる人間の差異を説明するために「物の関係と三様の人間」説が呼び出されたのである。

第二の種類の人間、すなわち「物の関係を変ぜしめる人」の例として、漱石は満鉄の社員と軍人、を挙げている。《例えば、満鉄会社の社員は鉄道屋で汽車を運転せしむる、豆を運ぶ、石炭を掘る、そして之を売る、又軍人などは敵を攻撃して敗北せしめる、敵兵を殺すなど、之等（これら）は何れも第二の分類に入れられる人である。（2）》

注目すべきは、そのすぐ後の第三の種類の人間である「物の関係を味わう人」の部分である。

《例えばこの卓子（テーブル）の上にある茶盆をを中央に置いて眺める、色々な感想が起る、―面白いなア、或いは小さなものだ、色がよい、ケチナ土瓶だなアてな事がすなわち物と物との関係を味わっているのである、この点から云ふと、愚にも付かない山を崩して鉄道を敷くとか、折角生えてる木を切って薪（まき）にするとか云ふことは第三種の人間から論ずると一向感服しない、（中村総裁前澤副総裁其他重役連の席を顧みて云ふ）而（しか）し以上の三ッの関係を明らかにするは至って面白い事で、人間としては必ず之等の幾部分宛を兼ねなければならぬものである、只一つのみの人間では社会に立って行く事は出来ぬものである。（傍線引用者）（2）》

これはかなり大胆な発言で、第三種の人間である文学者漱石から見ると、第二種の人間たちのやっていること、満鉄のやっている事は一向感服しない、と言い切っているのだ。これは、言い換えれば、第三種の人間である自分は、第二種の人間たちの宣伝などしないぞ、と啖呵をきっているようなものではないか。しかし漱石は、ちょっと言い過ぎたと思ったか、中村是公を始めとする満鉄の重役たちの方を向いて、むしろ一人の人間がこの三種類を兼ねなければ社会ではやっていけない、という風に、話をずらして、話をおさめようとしているように見える。

しかし、漱石は大連で働く人々（第二種の人間たち）に対して、控えめながら、さらに追い討ちをかける。たしかに金儲けをしない第三種の人間である自分は日本で《きたない小舎（こや）の様な處》住んでいるのに対し、大連はホテ

ルも立派だし満鉄総裁の邸宅はDancing Room（舞踏室）もある廣い見事な処だが、《元来新開地の新事業と云ふものは何處まで行って止むか一寸（ちょっと）其停止の時機が来ないのである、恰も、囲碁の様に一つの石を下（おろ）して次の石に移り更らに又後の石を下ろさんとするので、金の運転の出来る限り新事業新設備は踵を接して起こって来るのである、……物と物との関係を変化せしめんと欲して生活して居る其諸氏の精神状態はRestless（休息なし）に烈（けは【（はげ）の間違いか】）しく落ち付きがない、飯もろくろく食へないと云ふ人があるかどうかそれは知りませんが兎に角多忙で次から次に移て行く、事物を能く含味する暇がないと云ふ點に於て私が満州見物に来たのと同様の状態に在りはせんかと想像する（3）》と述べて、第二種の人間の生活が決して羨むべきものではないことを指摘している。

そして新開地には「物を変化せしめる人」は多いが、「物の関係を究（きわ）める人」も「物の関係を味わう人」も少ないと述べた後で、漱石はさらに、《物と物との関係を味ふと云ふ事は或は自己以外の人に解せられない場合がある、それで物の関係を味ふことを何の必要なるものかと聞く人がある、斯の如く味ふ事の出来ない之等の人は私をして言はしむれば寧ろ憐れむべき人だと云はねばならぬ（4）》とまで言っている。

「物の関係を変化せしめる人」を前にして「物を味わう人」である文学者・芸術家の立場を擁護すること、それは「物の関係を変化せしむる人」の頂点に立つ満鉄総裁に向かって自己の立場を誇り高く主張する事であり、「物の関係を変化せしめる」満鉄の事業の礼賛と宣伝は御免被るという暗示でもあったのだと思われる。「うん貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやる」という是公の言葉は、そのことを是公が理解し、満鉄の「提灯持ち」を漱石に無理強いすることをあきらめたということを意味しているのではないか、漱石のジレンマはこの

講演を機にある程度解消したのではないか、と思われる。

是公は「物を味わう人」ではなく、《是公は自分の小説など読んだ事はあるまい》、と漱石はどこかで述べているが、文章を書くこともまれであった。是公が漱石について述べた言葉は次のような非常に短い人物評のみである。

《その頃（若い頃）から正しいこと一点張りで理に合わぬ事は少しも受付けないと云ふ性質で友人からも尊敬されていた。……一体が世の中に阿（おもね）らぬ性格で今頃の文学者には珍しい。》［漱石・1996・27］

四、おわりに

私は三、（1）で次のように述べた。《なぜ講演が容易に出来ないか、その理由を講演》という要約は、とうてい講演全体にはあてはまらないように見える。『満韓ところどころ』の漱石の発言には誇張があったように見える。言い訳めいた前口上は右の引用からさらに続き全体の二割ぐらいを占めているが、講演の八割は題名が示す通り「物の関係と三様の人間」を論じているからである。》実際講演を始めから読んでいくとそうとしか思われないのであるが、さらに読み進んでいくと、「物の関係と三様の人間」説自体が「講演が出来ない訳」を説明するためにも援用されていることがわかってくる。

《然るに大連の如き處において事物の送迎に閑なき丁度私が満州見物に来た様な状況で果たして之等【文学・芸術・宗教】を味ふ暇があるかどうか甚だ疑問とする處である、恐らく此の大連が物質的発達に之れ日も足らずして恰（あたか）も欧米の粋を抜き之と相併馳するまでは決して止まざるべき進歩の間に於ては必ずや充分物と物との関係を味ふと

云ふが如き落付きのあることは先づ出来まい……物質文明に追はれて送迎に逞（いとま）なき其第一期を経過し、次で第二期に入り落付も出来初めて漸く物を味ふ即ち角度を多くして味ふと云ふ時代に移るものである、そして其時に到って私のやってる仕事又は私共の仲間の仕事が味はるるに至るものである、随分間遠ひ仕事であるが其時機に於て私共の演説だとか講演だとかが初めて耳を傾けらるるものであるから其時に演説でも講演でも致す事としませう（４）》

ここまで読んでくると、現在の大連はまだ「物の関係を変化させる」ことに多忙であって、とうてい「物の関係を味わう」余裕がなく、講演をしても聞く耳自体がないから、講演ができないのだ、という漱石の主張が見えてくる。この意味で、《その内の一遍では、云う事が無くって仕方がなかったから、私は今晩、なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと云って、妙な事を弁じてしまった。》という漱石の言葉は誇張ではなかったのである。

最後に、満鉄が、白鳥庫吉（東洋史学者）や橋本左五郎（畜産学者・漱石の友人）など「物と物の関係を明らかにする人」を招待して、《石炭にも大豆にも将（は）た又埠頭の事業にも関係ない人を迎えて、充分物の関係を明（あきら）めしめ満鉄自己の商売以外の部類に属する人に利益を與ふる人を呼んで、満州の生活を多角形となしたと云ふのは賞するに足る次第である（５）》と褒めて、次の様に講演を締めくくっている。

《終わりに諸君は常に満州の経営に任じて其事物を変化させつつ進む内にも物と物との関係を明（あきら）める人、或は関係を味ふ人等にも接するに至るが故に、諸君の生活は漸を以て円滑となり、近く何らかの反対が起こって複雑なる生活に移り行くであらう、而しただに其機をのみ俟たず其れ以前に既に前述分類の三者を兼ね備ふるは之れやがて諸君の幸福となるべきものであると信ずる、言意充分に尽くすを得ないが諸君之を諒せられたい（完）（５）》。

二〇〇九年一〇月三十日脱稿

引用文献

福沢諭吉『福沢諭吉全集』第十巻・岩波書店・一九七〇年
進藤榮一『東アジア共同体をどう作るか』ちくま新書・二〇〇七年
寺島実郎『「韓流」のうち外』（徐勝ほか編）御茶ノ水書房・二〇〇七年
三浦雅士『漱石　母に愛されなかった子』岩波新書・二〇〇八年
琴　秉　洞『日本人の朝鮮観　その光と影』明石書店・二〇〇六年
畑中康雄『日本近代化の思想』（鹿野政直著）講談社学術文庫・一九八六年
夏目漱石『漱石書簡集』岩波文庫・一九九〇年
海野福寿『韓国併合』岩波新書・一九九五年
石川啄木『日本詩人全集8・石川啄木』新潮社・一九六七年
夏目漱石『漱石全集』第十六巻　岩波書店・一九九五年
夏目漱石『漱石全集』第十二巻　岩波書店・一九九四年
夏目漱石『漱石日記』岩波文庫・一九九〇年
夏目漱石『漱石全集』別巻　岩波書店・一九九六年